

🍁 スリランカの日曜学校

現在のスリランカ仏教の一端を担う「日曜学校」は、僧籍を頂く私には素晴らしい人間教育の機関であると思われる。また同時に、仏教伝道所としての役目を担っていると思う。実は私は、スリランカ、ガンパハ市のサママハビハラヤ(日本名「平和寺」) タランガッレ・ソーマシリ住職とのご縁で「スリランカ」を知り、学ばせて頂いており、以下に記すことは、ソーマシリ師にご教示いただいたこととお断りしておきたい。従って、この原稿で紹介する日曜学校は、サママハビハラヤ平和寺の「スチャリトーダヤ日曜学校」の様子である。

日曜学校は「仏法僧」を教える学校である。平和寺境内の一角にその日曜学校がある。授業は日曜日である。雨の降る日は、寺院の中に入り授業が行われている。現在の在籍者は小学校1年生から高校生までである。年齢は5歳から18歳まで、毎日曜日に強制ではなく任意で出席している。実際には、低学年の子供の方が多く占められている。総勢約600人であると聞かされている。

日曜学校で使用される教科書はスリランカ文部省の配布によるもので、全国共通である。主に「仏教」に関する科目で、釈迦や釈迦の弟子たちに関わる物語、仏教史、お経などである。「スチャリトーダヤ日曜学校」の校長は「平和寺」副住職で、ソーマ師の日本出向に依り代務となっている。教師は当の日曜学校の卒業者を主に25人。生徒出席率は80%弱であるが授業料はなく寺の奉仕活動の一端として開かれている。日曜学校では試験も行われ、評価も得られる。政府が行う試験があり、資格試験に合格すると、スリランカ社会で就職する場合に有利な身分証明証となる。スリランカ人口の70%が仏教者であり、現状においては日曜学校に各家庭の子女が参加する意味も大きい。如何に仏教を継承していくか、次代の仏教徒の養成と人間教育を兼ねて日曜学校の教育は取り組まれている。私が知る「平和寺・スチャリトーダヤ日曜学校」は、近

隣の寺院のモデルケースであろうと思われるほど、熱気ある活動と運営がなされている。

「平和寺」を一例としてスリランカの日曜学校の大概を記したが、そもそもの日曜学校という概念は、スリランカの仏教指導者が、イギリスで展開してきたキリスト教の日曜学校運動を学び取り入れたものである。1780年以降、イギリスの産業革命の時代、日曜学校は鉱山や工場で働く幼年者たちの^{ひっばく}逼迫した生活状況に対処するために一考され始められた。この時代のイギリスでは、平日、子どもたちを学校で見かけることは少なかった。日々の生活の糧を得る為に子どもたちまで動員されたのであった。少なくとも日曜日だけが、日曜学校のお蔭で、子どもたちは仕事から解放されたのである。やがて、貧しい子どもたちにも教育が授けられるようになり、日曜学校は宗教を教える場になっていった。

スリランカの日曜学校について語る際、アメリカ人のオルコット大佐を先ず語らなければならない。その人の指導力によって、スリランカの日曜学校など仏教教育制度の復活が推し進められたのであった。当初は設立に困難なことがあったが、先ずはどうか日曜学校が設立された。その後、コロombo市内に次々と日曜学校が設立されるようになり、オルコット大佐が代表する日曜学校はスリランカで初めての「仏教英語学校」の母体となり、今はアーナンダスクールとして、名門カレッジとして有名である。そして日曜学校が殆どの寺院に敷設され、その中の幾校は、仏教平日学校に変わっていった。

日曜学校は、大方の寺院や「仏・法・僧」と結びついて、組織化も進んでいる。法的に設置された目的は、仏教を守り進展を促すことにある。又一方で、仏教を維持させる為の課外授業の感がある。しかし、昨今は社会事情が厳しくなり、スリランカでもエリート校を出なければ就職も難しいと聞かされている。すなわち試験突破学習に挑まなければという考え方が優先してくる

のだ。日曜学校を休んでも塾通いをするのが目的達成の早道となるので日曜学校に通う子供が少なくなるのではと懸念されている。しかしながら、日本人社会で忘れられている世界がまだ、スリランカ社会に残されていると思う。それはスリランカ人の、人間としていかにあるべきかという思想を育てて来たのは日曜学校の賜物であろう。スリランカの耀きと活力は、その礎となる仏教者の育成にあると私は考えている。

🍁スリランカ仏教

近頃、スリランカ仏教がクローズアップされ始めた。門外漢の私が、スリランカ仏教を云々する資格はない。ごく一般人の知識としてのスリランカ仏教のまとめを、タランガッレ・ソーマシリ師監修のもとで記したい。

スリランカ仏教を、上座部仏教(旧称：小乗仏教)とシンハラ仏教の二つに分けて記そう。前者はスリランカだけではなく、タイ、ビルマ、カンボジア、ラオスなどに共通する仏教である。後者のシンハラ仏教は、スリランカ独特の民俗信仰などが混ざり合っていて、基本的なシンハラ仏教寺院は「仏殿・仏塔・菩提樹」の3条件を揃えている。本堂内には、釈尊の立像、坐像、涅槃像をはじめ、仏弟子や過去仏などが安置されている。主たる本尊は釈尊である。信徒は寺院に参拝することによって功德を積むのである。そして功德を積んだものは死後、天界に生まれることができると信じられている。日本のお百度参りに似ている。他方、民衆の中に入り込んでいるのは、仏教寺院境内に配置されているナータ神、ヴィシュヌ神、カタラガマ、バッチェニ、サマンなどのヒンドウ教の神様である。ヒンドウ教の神々は、人間の希望や欲望を叶えて下さる現世利益対象で、そこに救いを求め、供物や賽銭などを差し上げる信仰形態となっている。シンハラ仏教とはそうした信仰も支持している。又、釈尊の教えに忠実に生きようとする上座部仏教者に近い点がある。スリランカの僧侶は、得度、受戒式、僧侶の生活義務などによる布

施と托鉢で生活の糧を得ている。結婚から死に至る通過儀礼においても、寺院と仏教徒の絆は深く強い。仏寺は、シンハラ新年祭、ウエサカ祭、ボソン祭、カティナ会等である。大概の檀家は寺院、僧侶と密接な関係にある。以上、概要を述べたが、社会貢献や奉仕活動も、勿論、行われている。仏教に基づく「日曜学校」の活動も目覚ましいものがある。

観るところ正に、スリランカの僧侶たちは仏教を継承していく役割を担っている。仏教寺院はその教場であり、スリランカの精神的な大遺産であり仏教文化そのものである。余事であるがソーマシリ師は、奉仕活動、社会貢献も数多くされている。スリランカ仏教者として、自国仏教は言うまでもなく、他事についても真摯な姿勢で取り組んでいる。この度、シャム派マルワッタッ本山より西部州(州都：コロンボ)監寺僧正として任命されることとの知らせを頂いた。

今年5月26日朝日新聞朝刊の「ひと」欄に、シンハラ語版「はだしのゲン」を刊行したスリランカ人僧侶としてタランガッレ・ソーマシリ師が紹介されました。ソーマシリ師のお名前は「わりい」にも何回か掲載されましたので記憶にある方もいらっしゃるかと思います。下記の朝日新聞(2015・5・26)の「ひと」欄によれば、ソーマシリ師は松林蓉子さんを「お母さん」と呼んでいるとのことです。(わりい会員/2011入会)

<http://www.asahi.com/articles/DA3S11773676.html>

ひと

シンハラ語版「はだしのゲン」を刊行したスリランカ人僧侶
Thalangalle Somasiri
タランガッレ・ソーマシリさん (55)



日本で心震える本に出会った。核兵器の非人道性を描く故中沢啓治さんの漫画「はだしのゲン」。シンハラ語に翻訳し、今春、スリランカで1、2巻を出版した。旧首都コロンボ郊外にある同国内有数の寺院「平和寺」住職。年に数回来日し、成田空港に近い千葉県香取市の蘭華寺で、在日同胞に布教活動する。12歳で仏門に入り、1988年、初めて来日し、東京の東大で学んだ。日本語の教科書や日本の昔話の本を出してきた。日本ペンクラブの正会員でもある。

故国は6年前まで四半世紀、内戦で混乱した。戦闘やテロの犠牲者は7万人超とされ、寺も一時、孤児ら約20人を保護した。「懸命に生きるゲンの姿は、私たちに平和の尊さと勇気を教えてくれる」

昨秋、改めて広島の原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れた。決意を固めて、翻訳に取りかかった。2時間早く起き、午前5時のお勤めまで机に向かう。作品中の広島弁や俗語などの意味は、松林さんにネット電話で教わった。3月末、蘭華寺と一緒に出版を祝った。5年で全10巻を出す予定だ。故永井隆医師が被爆体験をつづった「長崎の鐘」の翻訳にも取り組む。「平和を祈るのは宗教者の務め」

文写真 岩盛典